

セピア色した

悪童と呼ばれし頃も懐かしくセピア色した写真一枚

弁慶

やんなんなあお前のベーゴマ持つてるよ捨てつちまつか俺の棺桶

海月

盲目の義父の語りを書き取りて甘酒売りの声響く夜

海斗

甘酒をふーふー飲みつつ戻りゆくあなたの故郷わたしの故郷

たまこ

機窓から見ゆる小磯の故郷の立ちたる岩に今も白波

蘇生

我が妹子は失せりにけりないたづらにしらたき豆腐鍋の間に間に

海斗

長ねぎは斜めに切ってはいけないよ眠りし妻の言葉を守る

田所勉

玉葱をきりて涙す吾妻の横顔見れば老いの兆しが

弁慶

しらたきの滝をば吾は流しをり眺めせしまにフンコ満足すき焼き返歌

海月

箸速き友とすき焼きくらわんと思えど肉は絶え絶えにけり

弁慶

三角や丸や矩形やおでん鍋ライブドアから若き箸飛ぶ

真奈

どろどろと欲と理念があざなえる右往左往の株の末路は

蘇生

切り株に芽生えし若芽はやわらかな春の日差しの中にあるかな

弁慶

梅の香は春の温みを待つところ沈丁薫る春や溢るる

海斗

明日ひらく晝ばかりを選びて食む鴨(ひよ)の食欲まこと健やか

かわせみ

春彼岸 父に供へむと丸めある白玉団子の目に沁む田舎

たまこ

ものの芽の青を抜かんや吾が墓へ彼岸参りの賑はぶ中を

蘇生

いざ子ども春の野に出でひらひらひらと酒酌み交はし嘆き歌はむ

海斗

花粉症うつりにけりな徒らにわが身ひとつの鬱にあらねど

真奈

哀れともいふべき人は目のかゆさくしゃみはなみずはなづまりにて

千種

願わくば杉の林に寝転びて花粉症なる病に罹らん

弁慶

こひ願ふ吾が足に夫の患ひよ癒えてふたたび大気にたたまし

れん

目の玉をひょいととり出し丸洗い出来ぬものかやスギ花粉症

蘇生

鳥避けの大きな目玉をつけられてさみしいさみしい時の楓

たまこ

遠くより子らのさざめき沸きあがり広場の鳥の空へ翔け行く

海斗

姿川遠き霞の彼方へと流れて末は思川かな

弁慶

春一番すぎて夜空に隆起する富士の裾野の煙りたつみゆ

れん

去年の実のいくつか残る枝をはり鈴掛の木は春一を待つ

たまこ

南総の花の香載せて春一番トラック野郎葛西橋ゆく

真奈

春一番雪解の水音こだまする裕の陰に猫柳咲く

たまこ

春寒の雨の大学謝恩会「謝恩」を受けて夫がもどる

たまこ

春寒の一日小さき者とめて玄海島の地震をも知らず

文枝

春寒し雨は冷たく地震の報こじれし風邪の癒えて退院

れん

梅園の白き書を愛しむ生きてしあれば今日の一日を

丹仙

受診をへし母ともどれば陽はつらら猫に声かけ白梅あほぎ

たまこ

春雨にけぶるようなる昼下がりに診療室はマスク成人

蘇生

海見ゆる寺にけぶれる山菜莢の小さき地蔵に何か言ふらん

真奈

午後からの雨があがりて今しがた風の浜辺に沈丁香る

蘇生

雨足の遠さかり行く峠道春の日差しの暖かきかな

弁慶

澄みわたる空の青さよ月つるみ春の夜風のいささか冷たし

れん

秀吉の一夜城より北見れば江ノ島鎌倉春霞の中

弁慶

秀吉の右手の親指一本あり噂話も夢のまた夢

海斗

もののふの古道たどればそこ此処に今はとばかりはくれんの花

蘇生

はくれんのほたと落ちをり心の臍化天の内も夢は吉豊

海月

先きゆきの展望こめて夢でなくされど現はゆめ一畳か

れん

夢のやつな日だつたと思ひだすだらう丘には石の風車が廻り

たまこ

小雨降る夜の銀座の路地の奥赤い風車の踊り子の歌

弁慶

今だけが生きてる証し望郷の外人部隊のピラ風に哭く

真奈

スマトラをまたも襲いし大地震衆生済度の慈悲もなきかな

蘇生

天地(あめつち)の理(ことわり)(ゆゑ)にその上に生を受けたる者や哀しき

海斗

ぼくのせいラジカセ欲しいと云つたからかあさん死んだとうさん死んだ

海月

父母の既に世を去り幾年ぞ異邦人のこと故里の宿

れん

故郷の花の散りかふ石のうへ独り我が身の影を歩ます

丹仙

小さき影を踏んで踏まれて戯るる親子の頭上を春陽が渉る

たまこ

金曜日午後の堤に竿のべて玉の春日の風に親しむ

蘇生

コンビニで子供の土産買ふついでパックの酒を提げる臙夜

海斗

おだやかな春のひざしのそそぐなか頬をなでゆく微かなる風

弁慶

春風に潜りこまれてむつりの櫛くすくす古葉をちぢす

たまこ

随心院小町の井戸の春落ち葉我が心情を隠し尽くして

千種

吹く風の音のかそけき春の日に一人静の白き花咲く

弁慶

大地からからくも噴き出つ赤き芽は芍薬ならむ風の微かに

れん

芍薬の若芽の尖の露の玉 風にかすかに小鈴の音する

たまこ

磯波のゆらぎにまかせゆらゆらとゆらぐ若布や春は来にけり

蘇生

若布刈る人に尋ねん波の下に花の都のさぶらつべしや

弁慶

高校の窓辺に友と語りにき冠雪の山の向かうの東京

たまこ

道づたひに求め来し姿あせんとす故里の山まさに関かれ

れん

開発を阻止し残りし裏山の神さぶるかな大山櫻

蘇生

目をしひてロザリオ胸にかけたる君はにはかに神のもとへゆく

れん

わが灰は大猫隣り埋めよてふわざわざ海に行くまでもない

海月

蛇行する川面に写る曇天に浮く花びらは希望のごとし

たまこ

足柄や相模に流るる花吹雪彼方に春の雪の富士みゆ

弁慶

国分川若木の花の光りつつ天の点なる雲雀囀る

千種

眼科室窓の形に見たりしは初桜なり空の青さよ

れん

山の際にほつほつ白き夕桜老い木は花もかそかなりけり

かわせみ

やまざくら咲きにけらしな緑なす真木立つ山の裾のあたりに

弁慶

生き代わり復たみむと思ふ遠桜息子の肩越しにうすく烟りて

花

若き木の枝垂れ桜の蕾つく大木は病みうち倒されたり

れん

老木に胸吹き桜の枝見ればいのちの限り咲けよとぞ思ふ

真奈

吊革に諸手預けて車窓より眺めせし間の櫻なりけり

海斗

爛春に急な夏日の昼下がりに上着を手にし花に連なる

蘇生

春けばしるぎ翼をゆるがせて鳳となる夕べ桜は

かわせみ

鳳のごとき喜びDr.を頼りて夫の明日は退院

れん

退院の君を包むは満開の桜なるかな穏やかであれ

雛菊

花も充つモーツアルトなど聴きながら薄茶で乾杯しようじゃないか

海月

眼裏に顯つや万朶の吉野山「そつねえ！それもいいかも知れない」

花

ありがたう幾度も言ひて夫退院あたたかきこころ桜盛りなり

れん

白むまで『西行花伝』読みをねば女院の声の華やぎて明し

真奈

華やぎて鳳のごと爛漫と群れ咲くさくら薄墨に映え

れん

寄り添ひて寄り添ひをりて花筏生きてをること不思議と思ふ

海月

左手と右手あることわたくしがここに在ること昼の薄月

かわせみ

埒もなきこと告げ合いて寂しけれ存在証明のごときメールは

花

爛漫の花は静かに雨に添い夕べに白く爛々とせり

蘇生

降りつづく雨のやつやく真夜に入り桜一木のまれて消ゆる

れん

やはらかき雨もいつしかこはらかに花の名残りを絶つがごとくに

蘇生

春北風吹きぬけてゆく国境夢のかけはし花を掲げん

真奈

風吹けば相模へ流るる花吹雪乙女峠の春の夕暮れ

弁慶

夕の暮れ真夜の闇はもあけたれば桜つつつに甦りたり

れん

見飽かぬといふよりもつのる枯濁感さくら並木をゆけどもゆけども

たまこ

さくら道抜けて訪ねし老ホーム壁に貼られし小学唱歌

文枝

花の道登り辿れば北の空彼方に春の雪の富士見ゆ

桃李和歌連作百首歌集

第六四〇一首より六五〇〇首迄

平成一七年三月十二日より平成一七年四月十四日